第十六回研究集会印象記

第十六回研究集会
二〇一六年八月二十七日（土）午後二時～
弘前大学
◇ラウンドテーブル
横光利一×太宰治
◇基調報告
・中村三春「小説的アヴァンギャルドの帰趨―横光利一と太宰治の軌跡―」
・松本和也「文学場における芸術性／社会性―太宰治「玩具」・横光利一「純粋小説論」」
◇全体討議

研究発表印象記

田口律男

A　どうだった？　ラウンドテーブル「横光利一×太宰治」。行きたかったけど、お金も時間もなくて。

B　それは残念。でも、一言でいうのは難しいな。企画の趣旨は明確だった。「具体的な作品の検証を通し、双方の小説に現れた方法意識を浮かび上がらせ、単純にはつながらない二人の「接点」を探ってみたい」。でも、この「接点」がなかなか手強くて……。

A　二人の基調報告はどうだったの？

B　とてもクリスプだったよ。中村三春さんは、両者の小説的アヴァンギャルド性をこの上なく明晰かつ体系的にまとめてくれたし、松本和也さんは「純粋小説」をめぐる文学場の反応を精査し、太宰「玩具」のテクスト分析にも切り込んでくれた。

A　それは贅沢だね。でも、論点が絞りにくそう。

B　そうなんだ。参加者のディスカッションは盛り上がり、司会の山本亮介・位田将司さんが目指したブレーンストーミングは成功したけれど、論点が拡散したことは否めない。

A　どんな話題がでたの？

B　いずれも両者の「接点」を探りつつなんだけど、憶えているだけでも、詩と小説の関係、形式と実存の関係、一人称語り小説の差異、単一表現や四人称の意味、ジイドとの距離、短編と長編の関係、言語感覚の差異……といった論点が飛び交ったように思う。

A　めまいがしそう（笑）。個人的に注目したことは？

B　やはり基調報告の二人の発言が随所で光っていたね。でも、二人の立ち位置は微妙だけど決定的に違っていた。中村さんは、従来の文学（史）的通念を捨て、断片化・節合・断章集積・引用・アフォリズムといった小説様式のアヴァンギャルド性を問題にしていたのに対し、松本さんは、昭和一〇年代の社会的コンテクストにおける文学的戦略性を問題にしていたように思う。だから、たとえば中村さんは、すべてのテクストが原理的に「社会性」を帯びると主張したのに対し、松本さんは当時の文学場に発生した（社会関係資本としての）「社会性」にこだわっていたように見える。参加者の議論も、その視差のあおいを行ったり来たりするので、拡散するのは当然だったかもしれない。

A　課題は論点の絞り込みだね。それで、横光と太宰の「接点」は見つかったの？

B　小説様式の「接点」についていえば、中村さんの発言が、ほぼ全てを言い尽くしていたと思うよ。ただ、具体的なテクストに向き合うと、読者は黙っていられなくなる。じっさい松本さんは、太宰の「玩具」にボードレール象徴詩の影を追っていたし、参加者も細部の読みを競り合っていた。

A　中村さんは、そうした受容のあり方も含めて、アヴァンギャルド様式といっていたのでは？

B　それはそうなんだけどね。いずれにせよ横光利一文学会としては、新しい研究課題を発見したことになると思う。川端康成学会とは、ずっと合同研究集会を続けてきたけれど、これからは他の同時代作家たちとの「接点」を求めて、それぞれの個人学会とジョイントする可能性が見えてきた。愉しみだね。

A　愉しみといえば、弘前の街はどうだったの？

B　みんなには内緒だけど、学会前日、雨の弘前市内をランニングして回ったんだよ。とても歴史の重層性を体感できる街だった。雨にけぶる岩木山は、翌日、弘前城から拝ませてもらったし、ついでに青森市まで足をのばして、太宰の下宿跡も確認できた。懇親会では、仁平政人さんの心遣いで、津軽三味線のライブも堪能できたし、とても贅沢な時間だったよ。

A　太宰も横光も、草葉の陰で照れながら、微笑んでいるかもしれないね。お疲れさま！

研究発表印象記

山﨑義光

西暦二〇一六年八月二七日、日本国青森県弘前市。北緯40度35分21.2秒、東経140度28分17.6秒在、弘前大学にて開催。直前に台風通過。さらに近づく台風の合間の好天に恵まれた。参加者の多くは、最高速度、時速三二〇キロで沿線の小駅を黙殺しながら疾走する東北・北海道新幹線で、総勢約三〇名が集まった。

一四（ヒトヨン）：〇〇（マルマル）、ラウンド状の机に隙間なく着席。すでに秋らしい午後の日差しと涼風の流れ込むなか開会。二名の基調報告をもとに、二時間の質疑、意見交換が行われた。企画「趣旨」のとおり、横光と太宰はテクストに痕跡を残した「接点」が少ない。報告は、その困難な課題に対し、異なる二つの問題設定から論じた。

ミハル・ナカムラ氏は、横光や太宰に関する分厚い研究実績がある。それをふまえ、アヴァンギャルドの美学理論の発射台から、両者のテクストを、現代そして未来に向けて解放すべく、歌うがごとく滔々と論じた。断片性と再結合の振幅という共通性を持ちながら、異なる軌跡を描いた両者のテクストを、

日本の論壇という同時代的言説の時空を脱した、テクストの「軌跡」として捉える可能性を示唆。「横光・太宰」の文芸テクストの強度を考量し、「人類史的意義」を考究すべしと提起するところに報告の核心があった。二一世紀における研究「知」の展望を含む報告だった。

続く、松本和也氏は、横光が「純粋小説論」（一九三五・四）で、「純文学にして通俗小説」としての「純粋小説」という理念を提示したことを年代記的里程標とし、その前後の文学理念をめぐる対話的な場をコンテクストとして、太宰の小説「玩具」（一九三五・七）を据えた。文壇の中心にいた横光が、当時の社会的要請にいかに応えるかという使命を背負い、芸術性よりも社会性に重点を移行させたのに対して、「玩具」を精細に分析し、ボードレールを材源とする「詩」的芸術性において評価しうるとした。年代記的でローカルな日本文壇における対話的時空間に、横光と太宰のテクストを位置づけ、両者を芸術性と社会性という尺度で評価した。

討議は、太宰から横光を見るという観点から開始。「玩具」について、引用・翻案等の手法、語る「私」の水準の解釈などが議論された。また、芸術性と社会性をめぐり、テクストのもつ「社会性」とは、時代要請的に求められた社会性と、あらゆるテクストの有する社会性とは区別して考えるべきではないか、純粋小説が長編として想定されたのはなぜかなど、基調報告の論点を、多角的に討議した。二時間は短く感じられた。

「玩具」の発表誌『作品』は、「雑誌界の最も信頼に足る貿易港の一つでありたい」という発行趣旨をもつ。第一次世界大戦後、地球規模での連動、世界的同時性が政治・経済から日常生活に至るまでリアルなものに成りつつある時代。横光は、国際的貿易港「上海」を舞台に小説を書き、『旅愁』では、西洋に対する東洋・日本を分立する文明・文化と捉える視線を描いて、地球上に隣接する他者間の交流・係争を捉えた。二〇世紀前半、「世界戦争」後の「世界平和」への希求から、国際連盟、共産主義の世界同時革命、世界政府、世界最終戦争論が現れた。その帰趨の半ばを我々は目撃した。横光「微笑」の、秘密兵器「光線」を発明したという、狂人か天才か不明な、微笑する科学者の姿は、世界と身体、未来と現在の挟間に引き裂かれた姿のようだ。

文芸テクストを同時代の言説空間のなかでいかに文脈づけるかという問い。あるいは、そうした時空的コンテクストから脱却して文芸テクストの可能性をいかに解放しうるかという問い。私は、自らの課題を顧みて、微苦笑するほかなかった。

資料紹介

自筆原稿「塩」について

松寿敬

横光利一の自筆原稿「塩」は、宇佐市が平成十七年に東京都内の古書店から購入し、宇佐市民図書館が郷土資料として収蔵している資料です。これまで全貌を公開する機会に恵まれませんでしたが、昨年開催した展示会（9月17日～10月30日）で初公開したところ、新聞二紙に取り上げられました。一紙が社会面で「新発見資料」と誤解されかねない小見出しで報じたため、ご覧になった方には混乱を招いてしまったのではと心配しています。「旧蔵資料の初公開」という情報を提供したつもりでしたが、受け手側にも理由があっての紙面なのでしょう。記事情報は以下の通りです。

・作家・横光利一／遺稿「塩」直筆原稿／――大分・宇佐市民図書館員が発見

（『毎日新聞』平成28年9月28日 社会面・P

【会員名簿】二〇一七年一月現在

粟飯原匡伸　明石玲子　渥美孝子　李錦宰　砂澤雄一　石井佑佳　石川則夫　石田仁志　石橋紀俊　和泉司　伊東佳朗　井上明芳　井上聰　岩崎洋一郎　位田将司　浦田剛　王天慧　大内拓人　大川武司　大川内夏樹　太田鈴子　大村梓　小川直美　奥山真澄　小田桐弘子　小野憲男　掛野剛史　片山倫太郎　加藤夢三　◎神谷忠孝　河田和子　川畑和成　姜素英　鬼頭七美　金泰暻　木村友彦　教誓悠人　日下宗大　久保田輝　久米依子　栗崎愛子　栗坪良樹　栗原正憲　黒田大河　小林幸夫　小林真二　小林洋介　佐藤健一　佐藤良一　佐山美佳　重松恵美　渋谷香織　島村健司　島村輝　謝惠貞　常思佳　庄司達也　松寿敬　鐘俊梅　辛西永　杉浦晋　鈴木和佳子　須藤宏明　瀬川嘉子　副田賢二　杣谷英紀　平幸治　高木彬　高橋幸平　田口律男　竹内清己　舘健一　舘石浩信　舘下徹志　田村嘉勝　土屋忍　土田俊和　十重田裕一　友添太貴　鳥居千恵　中井祐希　中川智寛　◎中川成美　中沢弥　中村三春　西尾宣明　二瓶浩明　仁平政人　野坂昭雄　野中潤　芳賀祥子　花崎育代　羽原卓也　原卓史　◎伴悦　韓然善　日置俊次　久本千佳子　福田和幸　福田淳子　藤島月美　藤原崇雅　古矢篤史　別所誠　松村良　宮口典之　村田好哉　マータ・クリスティーネ・メンツェル　◎茂木雅夫　諸岡知徳　柳沢孝子　八原瑠里　山口直孝　◎山崎國紀　山崎義光　山本剛史　山本亮介　矢本浩司　横山恭一　吉田司雄　李慧珏　劉妍　呂慧君　脇坂幸雄　脇田美穂子　和田崇

（以上一二六名　◎は名誉会員）

横光利一文学会会報　第30号
二〇一七年一月二五日　発行
◆横光利一文学会事務局
〒112-8606　東京都文京区白山五-二八-二〇
東洋大学文学部日本文学文化学科　山本亮介研究室内
☎　03-3945-4255
公式URL　http://yokomitsu.jpn.org/
◆編集人　掛野剛史　石井佑佳　井上明芳